

緑化植生シリーズ(6)

芝生の肥料 — 緑にこやしを —



ヒメコウライシバにバーチカルモアをかけたところ 8月

頻繁に刈られるローングラスの草丈を合計すると1年に3mも伸びることになるといわれています。

芝生はどの位養分を吸収するか。 Wisconsin でベントグラスを、テネシーでパミュダグラスをパッティンググリーン用として刈取った葉から年間の成分量で乾物量と共に分析調査した結果は次表のとおりです。

ゴルフ場パッティンググリーンの芝の年間要素消費量と乾物 (kg / 1000m²) Dr. O. J. Noer

養分	ベントグラス	パミュダグラス
窒素	23.2	27.7
リン酸	8.4	7.4
加里	15.3	16.8
乾物	479.2	592.9

このように肥料要求量は相当なものです。このうち芝草の伸びに最も大切な窒素肥料は草種によってかなりの差があります。低いものより高い草種の順位は

コウライシバ < レッド・フェスク < トールフェスク < メドウフェスク < ペレニアルライグラス < セントオーガスチン < ケンタッキーブルーグラス < パミュダグラス品種 < コモンパミュダ < ダイコンドラ < コロニアルベント < クリーピングベントグラスとなっています。

三要素のバランス

植物体の分析値からみれば、前表のごとく3:1:2ですが、要求量とは別に土性を考慮しなければならないので、施肥の概念はベントグラスで2:1:1、フェスク、ブルーグラスで2:2:1ということになります。火山灰土壌ではリン酸吸収率が高いので、リン酸を多く施しておかないと、芝生の可給態リン酸が不足することになり、また極寒地では加里の不足が越冬条件を悪くするなどの点に注意する必要があります。一般にこれらの要素を含んだ肥料は化成肥料として販売されているので、そのバランスを考え、1銘柄にしないで2~3銘柄を使っ

て年間のバランス維持に努めた方が効果的といえます。

施肥量と回数

三要素バランスの基本になるのが窒素肥料ですが、各草種別に成分量で示せば次表のとおりです。ところが、これだけの肥料を一般農業や牧草並みにどんと投入すると肥料焼けを起こしやすいので、少量ずつ回数を多く与えねばなりません。家庭の芝などは忘れないよう毎月1回を決めて施してもよいが、ゴルフ場、公園など管理を任されている場合は、春は3週間隔、夏は1/2量を2週間隔、秋は4週間隔という方法をとるのが好ましいとされています。

芝生の草種別窒素施肥量 (kg / 1000m²成分量)

草種	年間の基準量	毎月1回の量
コウライシバ	10 ~ 20	2.5
フェスク類	20 ~ 30	3.8
ブルーグラス	30 ~ 40	5.0
パミュダ類	40 ~ 60	5.0 ~ 7.0
ベントグラス	50 ~	7.5 ~ 10.0

最近話題となっている緩効性肥料は有機質肥料などと似ていて肥効が持続するので、3ヵ月間隔で施してもよく、アメリカでは日本から輸入して盛んに使われるようになりました。

目土 (トップ・ドレス)

芝生が古くなると、凹地ができたり、土壌が固結し、マット状となり、また芝茎 (サッチ) がせり上がってきます。このような場合、肥料の補給も兼ねて目土 (メツチと読む) を行なう。ゴルフ場のグリーンでは床土と同じ材料を使うので目砂と呼んだ方が適切かも知れないが、トップ・ドレッシングは単に芝地と同じ土壌をばら撒くというのではなく、前年10月頃1m³の黒土 (壤土) に油粕粉末37kg、骨粉5kg、米糠13kgなど有機物をよく混合して積重ねておき、春切返したものを撒布します。目土の量は1m²あたり約2~4ℓ、厚さでは1.6~4mmが標準で、1cm以上の厚さでは障害となります。目土の撒布後乾燥させ、チェーンマット、または箒で芝草の中にむらなくすりこむようにします。

土壌固結に対する耐性は草種別にみると低いものより高い順に次の通りです。クリーピングベントグラス < コロニアルベントグラス < ダイコンドラ < レッドフェスク < セントオーガスチン < ペレニアルライグラス < ケンタッキーブルーグラス < 日本芝 < コモンパミュダ < 改良パミュダ < トールフェスク。

目土はやたらにやればよいというものではなく、グリーン以外はサッチの状況次第で、芝地の通気のためスパイクングや刈高、枯葉の除去などと関連をとって行なうようにして常にみずみずしい活き活きとした緑の芝を維持するようにします。